



【召天者記念礼拝説教】 2018年11月4日  
説教題 主はすべての顔から涙をぬぐって下さる

聖書 イザヤ書 25章6～10節  
ヨハネの黙示録 21章3～4節

説教者 武田 真治

### 1、花葬

旧約聖書の考古学者である月本昭男氏によれば、旧約の時代のカルメル山を発掘された際に、二体の骨が同時に出てきたことがあったそうで、調査の結果、母親とその娘が病気か事故かで同時に亡くなり家族と一緒に遺体を葬ってあげた墓の跡だろうと想定されたのだそうです。ただ、そこで特徴的であったのは、その遺骨の周りの土にミントやサルビアなどの花の花粉が大量に見つかったそうです。これはその二人の死体を埋葬する際に、たくさんのお花で飾りこれらの花と一緒に埋めたという当時の埋葬方法を示していると考えられるとのことでした。それはまさに「花葬」です。聖書の時代にも花でご遺体を飾り、花と共に葬っていたのでした。

また、この点に関連して、更にはるかに古い時代、ネアンデルタール人の遺骨が発見された洞窟の中でも、その遺骨の周りから十八種類の草花の花粉が出土したそうです。ここから月本氏は、遙か昔から人類はホモ・サピエンスでもネアンデルタール人でも、共通して愛する者を葬る際に花でその遺体を埋めて葬っていたということが分かると言われ、このように亡くなった者を丁重に葬るという行為は、他の類人猿（猿やチンパンジー等）は行うことはなく、「ヒト」だけが持っている（＝与えられている）特質であり、それこそヒトのヒトである所以だということでした。なるほどと思わされました。

本日の召天者記念礼拝にあたり、何よりこうして私たちがここに集められているのは、そのように神様に創られている人間としてとてもふさわしい行為であることを思い、改めて神様に感謝する者です。

### 2、死体の顔を覆う布

読んで頂いたイザヤ書にも、当時行われていた死者に対する「葬り」の様子が記されています。

ここにはまず「民の顔を包んでいた布」が出てきています。当時、死者が出るとその顔全体を覆う布がかぶせられました。日本でも死者の顔に白布を掛ける風習がありますがそれと似ています。また次の「国（＝体）をおおっていた布」も、当時ミイラのように全身を亜麻布（リネン）で巻いたのでした。同様に日本でも死に装束を着せたり、わざわざ棺の蓋を釘で打ち付けたりします。

どうして死者の顔や体を覆ったのかということについては、旧約の律法で死体に触れることで汚れる、出血している血に触れることでも汚れると考えられていたからですが、もう一つの理由として、死体の顔を見ることや死体に触れることで生きている者が死者の国へ一緒に連れて行かれることを恐れたのではないとも言われています。それらの処置を施すことは、人は死ぬことでこの世の存在ではなくなることを示す行為と言い得るでしょう。そしてそうすることで、もはや自分たちとは隔絶されたものとなったことをはっきり示そうとしたと言い得ます。





生きている者が死に捕り込まれないために。そこには明らかに〈死に対する恐怖〉があります。

同じことが当時、お墓は町の中に造らず郊外の小高い丘の上に造ったことからとも言えます。ギリシャやローマではそのような場所をネクロポリス（死者の町）として日常生活を営む地域から隔離しました。日本でもお墓はそのような場所に造られることが多いです。お墓は低地には造られません、雨水で浸水したり洪水で流されたりするからです。昔の日本人は里山の奥に墓場を設けました。しかし、それらの行為は死者を日常から遠ざけるものです。「死」が日常に入り込んで来たら具合の悪いことが起こってしまう、通常の生活が阻害されると考えていたからでしょう。故に死は縁起が悪いこととして忌み嫌われたのでした。

### 3、「死を滅ぼしてくださる」

ここで預言者イザヤは「万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。主はこの山ですべての民の顔を包んでいた布とすべての国を覆っていた布を滅ぼし、死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことである。」と語っています。「主が語られたことである」とありますから、これらは未来に起こる出来事を神様がイザヤを通して教えて下さった預言だと言い得ます。

その時がまさにイエス様の到来によって実現したのではないのでしょうか。この地上に降りて来て下さり、十字架に架かることで私たち人間の罪を代わって担って下さり、三日目に蘇って下さったことによって「死」を克服して下さいました。もはや死は「恐ろしくない」こと、私たちの上に力を持たないことを示して下さいました。

そして更に自ら天へと昇られること（＝昇天）で私たちに「天への道」を開いて下さいました。

これらのイエス様が私たちのために為して下さいましたすべてのみ業は、まさしく「死を永久に滅ぼす」ための行為だったと言い得ます。それは恵みとして与えて下さった出来事だったのです。私たちはこのイエス様に従って行くことによって自らの死を越えて行くことが出来ます。この地上での死に支配されることはなく、その死がすべての終わりではなく、死の向う側に天のみ国で生きる（＝復活する）希望が与えられているのです。なんと素晴らしい約束でしょうか、何よりの祝福だと思えます。

それ故、ここでイザヤが「万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。」と預言している言葉についても、ユダヤ教の方々はこの「山」をエルサレム神殿があるシオンの山であると考えます（＝シオニズム）。しかし、私たちはそうは採りません。むしろこれこそ《天のみ国での祝宴》を指し示してくれている預言の言葉として私たちは受け取ります。いつか、神様のみ許で先に天に召された人たちと一緒にみ国の祝宴に招待されるのです。その時、私たちは神様のみ顔を仰ぐことが許されるのです。「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。」と伝道者パウロがその時のことを教えてくれているように（コリントの信徒への手紙一 13章 12節）。





まさにその天での祝宴をはるかに望みながら今を生きるのが私たち信仰者の歩みです。この希望を見失ってはいけない、ただこの世界の評価や報いだけを求めて生きるのではないのです。そのためにイエス様が私たちにこの地上で用意して下さったものが《教会の群れ》であり、その天の祝宴を今この時に示す《聖餐》なのです。教会の礼拝に出席し、聖餐にあずかる度に天のみ国での祝宴に想いを馳せるのです。

#### 4、「もはや死はなく、悲しみもない」

「死が滅ぼされた」ことによってもはや死体の顔に掛けるための「布」も死体を包むための「布」も使わなくてよくなり「滅びる（＝消え去る）」とイザヤは預言しています。それは私たち《天のみ国での祝宴》という希望に生きる私たちの葬り方を指し示しているように思います。教会での葬儀の最後には、召天者が納められた棺の蓋を開け、ご遺族がお花を棺いっぱいにし、まるでご遺体をお花で埋めてあげるように。時には葬儀式に出席された方々全員で棺の中にお花を入れることもします。その時もはや「顔を包んでいた布」は必要ありません。「(体を)覆っていた布」も必要なくなるのです。天に召された者は天のみ国で神様のみ許に蘇り、まことの平安と神様からのまことの慰めの声を聞くのです。そして天の祝宴に用意されている席に着くのです。そのことを信じて疑いません。その時には今日もう一箇所読んで頂いた聖書の箇所がまさに実現するのです。

即ち「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」と言われていたことが！

「もはや死はない」のです。これが聖書の言うところの《永遠の命》です。地上で永遠に生きるわけではありません。この地上の死を越えて天のみ国の主のみ許で生きようになることを言うのです。

「もはや悲しみも嘆きも労苦もない」状態は何も感じなくなるということを言っているわけではありません。《喜びと感謝で満たされる》ことを言うのです。まことの喜びに満ち溢れる時なのです！

(説教より抜粋、編集)

